

ウチのカルデア事情

ネイキッド無駄八

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りのFGO短編集。

目

次

オジサンとの約束

星の声 ↴ 悪漢王は嗤わない ↴

25 1

オジサンとの約束

『冠位指定』——グランドオーダー。

それは、滅びの運命を『証明』されてしまつた人類史の救済のため、時空の歪みである『特異点』を修正し、未来を護るための戦い。

そんな厳しい戦いに身を投じるのは、『人理継続保障機関』——カルデア所属、48番目のマスターである『』。

そして、『』に付き従う『盾兵』のクラスのデミ・サーヴァント、マシユ・キリエライト。

彼らの戦いにいまだ終わりは見えず、人類の明日にも、いまだ光明は見い出せないままなのであつた——

それはさておき。

「……マシユ。準備は万全かな?」

「はい、すべて滞りなく。先輩のタイミングで、いつでもいけます」

カルデアのセクターの中のひとつ、通称『召喚の間』。

床面に描かれた複雑な文様の前にたたずむ緊張した面持ちのふたりは、まつたく同じタイミングでごくりと唾を飲み込む。

眼鏡の少女をマシユと呼んだ若者——『』は、厳かな仕草で一枚の金色に光る札をポケットから取り出すと、床の陣に向かつて一步を踏み出した。

「もはや触媒はこれだけ……この、ログインボーナスで今朝配布されたばかりの呼符一枚のみ……！」

「はい……先日支給された百日記念ログボの聖晶石は、すべて星3礼装へと変わつてしましました……」

もう誰も泣かない世界のために。

クツソまずいガチャで血涙を流すのは、昨日の自分で十分だ。

終わらぬ連鎖を終わらせる、そのための召喚。

朗々と紡ぎ出される召喚の口上に呼応するよう、『』の右手に掲げられた呼符と召喚陣が強い光を発し、召喚の間に靈気が満ち満ちていく。

マナの円環が目まぐるしく輪転し、ついに臨界を迎えて収束したその瞬間。

『』は、声も枯れよとばかりに最後の言葉を謳い上げた。

「いざあ！ 抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よお！！ できれば星5のサーヴアントをお願いします！」

先輩、それ死亡フラグです。マシユが呟くのもつかの間。

立ち昇る光の柱から生まれ出たそれを目にした『』は、膝からがくりと崩れ落ちた。

「……『槍兵』。しかも、銀、だと……？」

「先輩！ 落胆する気持ちもたしかに理解できますが、さすがにまだ姿も現してない英靈に向かつてその言い草はいくらなんでもあんまりだと思います！」

「あ、～、やつてられねえ、やつてられねえよ～。テンション下がるわ～、つらいわ～。グランドオーダーとかマジど～でもい～わ～。マシユ～、おっぱい揉ませて～」

「うわあ、先輩が過去最高にやさぐれている…… 十連召喚したらサーヴァントが一騎も当選しなかつた上に、唯一出たのが『原始呪術』だつたあの時以来のやさぐれっぷりを発揮している……」

しまいには地面に仰向けになつてダイナミック五体投地を始める『』と、おろおろするマシユ。

「…………ふはは」

そんなふたりを前にして、参上の台詞すら口にするのも忘れて所在なさげに突つ立つていたその男は、やがてこらえきれなくなつたようにくつくつと小さな笑いをこぼした。

それを聞きつけるに至つて、ようやく召喚されたサーヴァントの方へと注意を向けた

『』とマシューは、これまたふたりそろつて目をまんまるに見開いた。

「あ、あなたは……」

「お前は……」

「いやあ、相変わらずいいリアクションするねえご両人。オジサンもサーヴァント冥利に尽きるつてもんだ」

ひとしきり笑つて満足したのか、ゆるい物腰もそのままに、その英靈はふたりの方へと進み出た。

長身を猫背に丸め、無造作に伸ばしたぼさぼさの髪を後ろでひとまとめに括つた、無精ひげの中年男。

いまいち霸氣の感じられない、しかしどこか底知れないしたたかさを湛えたそのサー・ヴァント——ヘクトールは、真正面から己の召喚主である『』を見つめ、懐かしそうに顔を緩くほころばせた。

「——どうだい。約束、ちゃんと守つただろ？ オジサン、また来てやつたぜ」

まず最初に若者が知覚したのは、異様な喉の渴きだつた。

「よつ、目え覚めたかい」

肌に感じる空気の熱に不快感を覚え、うーんと唸りながら半身を起こした『』へと、その男は瓦礫の上に腰掛けたままの姿勢で、気安そうに声をかけた。

意識がはつきりしないのか、『』はすぐには男の声に反応を示さずにうんうん唸り続けていたが、数呼吸おいた後、覚醒に至つたのかおもむろにガバッと立ち上がり、

「うおおお!? ここはどこだ!? てか熱つ!? 空気まつず!? はつ、そして周囲はなんだか見覚えのあるファスト風土！ そして、こちらに呼びかける謎のオツサンX! 誰なんだチミは！」

と、一息にまくし立てた。

ひとまず元気はありそุดなど『』の様子を検分しながら、男はひとつずつ、発せられた質問に答えていった。

「ここは…… そうさなあ、若者にも分かりやすい言い方をするなら、『炎上汚染都市冬木』つてことだな。熱いのも空気が不味いのも、まあ炎上して汚染されてるから当然だな。見覚えあるのは、お前さんがここに来たのがはじめてじゃないから…… あまあ、厳密に言えば？ はじめてには違ひないんだが。んで、できれば一番最初に聞い

て欲しかった質問だけど、オジサンの名前はヘクトール。『槍兵』のクラスのサーヴアン
トさ』

謎のオツサンX、もといヘクトールの答えを聞いた『』は、それを反芻するようにし
ばらく瞑目しながら黙考していたが、やがて顔を上げると、今度は実に手短な問い合わせを彼
に向けてもう一度返した。

『はじめてには違いない』って、どういうこと?』

「いいねえ、実に的確な質問だ」

ぱつと見は天然が入った抜け作だが、その実、見るべきところはきちんと見てている。

『』に対する認識を改め直し、ヘクトールはその疑問に対する答えを返した。

「若者の手で、既に冬木の特異点は修正し終わってるんだろう? だから、ここはいわ
ばバグの残骸の寄り合い所。修正からこぼれた時空の狭間のゴミ置き場、つてところだ
な」

「ゴミ置き場……」

しかめつ面でヘクトールの言葉をオウム返しにした『』は、改めて周囲を見回し、次
に瞑目してなにやら内心の集中に入り始めた。

その様をなんとはなしに眺めやっていたヘクトールの前で、きつかり三十秒経つてか
ら目を開いた『』は、忌々しそうに舌打ちをこぼした。

「カルデアと連絡がつかない…… マシューとも交信が取れない…… 参ったなあ、完全に孤立無援で放り出されたのか。大方レイシフトの誤作動だろうけど、これは帰つたらドクターはテキサスクローバーホールドだな……」

なにやら物騒なことをぶつぶつ口走りながら、その場でコツコツと小さく歩き回る『』。

この世界で目覚めた時とはややニュアンスの異なる唸り声をうんうんと発しながら動き回る若者の横顔を、ヘクトールは仔細に観察する。

（どうしようもなく困りきっている…… が、諦める気はまったくない。そんなところかね）

それはある意味、当然だろう。

この若者は、見かけよりもずっと強い。いくつもの修羅場をくぐつてきたし、これらももつとたくさんの戦場に赴くことになる。

立ち塞がる壁はあまりに高く、その道のりは艱難辛苦を極めるだろう。

（だからこそ……）

華奢な双肩に懸かつた大きすぎる責任——人類史の救済という、極大の願いを叶えるための闘い。そのためには、こんなところで立ち止まつている道理なんてどこにもない。

こんなところで諦めている暇も弱さも、この若者には許されていないし、自身に許してもいいのだろう。

ヘクトールは、己がここにいま、こうして立っている意味に思いを馳せる。

本来なら、自分の出番はもう少し先のはず。

この若者の前に大いなる壁として立ちはだかるのは、また別の世界線——あの、果て無き閉じられた大海原のはずだ。

それがここに、こうして立っている意味。

ヘクトールは考え、そして、結論づけた。

「——やれやれ」

『』の視線がこちらに向いていないのを確認して。

ヘクトールはほんの一瞬、厳しく真剣な内心の感情を、己の顔に浮かべるのを許した。彼にとって、軽佻浮薄な普段の面構えは、常にあらゆる事態を推測して警戒を怠らない切れ者である己の本性を覆い隠す仮面に他ならない。

天才を自称するバカより、バカを演じる天才の方がずっと厄介だ。

いつだつたか、とある男を評するのに用いたその表現は、そつくりそのまま自身にも当てはまることがだった。

だらしなさの仮面をほんの少しだけ外し、それを以て己への喝と成す。

己の内で静かに覚悟を固めたヘクトールは、再び仮面を被り直して眼前の若きマスターへと顔を向けた。

「なあなあ、若者よ」

「なんですかオジサン。知らない人にはついて行っちゃダメ、言うことも聞いちやダメだつて昔教わつたんですけど」

「そりやたいそう立派な心がけだけどねえ、現状そもそも言つてらんないんじやないの？ どうだい、ここはひとつ、オジサンと契約してみる気はないかい？」

「マジっすか!? 是非お願ひしたいっス!!」

即決も即決、一切の逡巡もない返事。瞳に星でも浮かべているかのように、きらきら輝く瞳で『』はズイズイッと瞬く間に距離を詰めてきた。

まさか断る手はないだろうとたかをくくつてはいたが、こうもあつさりと承諾されるとまではさすがに思つてもみなかつた。

いくらなんでも不用心すぎやしないかと、ヘクトールは若干この若者が心配になつてきたのであつた。

「……まあ、即断即決できるつてのは、ある種の美德か。アンタ意外と肝も座つてるみたいだし、今度のマスターはなかなか出来ると見えた」「よせやい褒めるな。照れるじやないか」

「…………」

やつぱり、不安だ。

「……んじやまあ、改めてよろしくな」

そう言つてヘクトールは立ち上がり歩を進め、『』に向かつて右の手を差し出した。それに応えるように、『』も立ち上がって、ヘクトールに己の右手を差し出した。

「サー・ヴァント・ランサー。これより我が槍はお前さんと共にあり、お前さんの運命は我と共にある。つてな」

「ん。よろしくお願ひします、オジサン」

「いちおう形だけはシリアスっぽく行つたんだから、そこは『ヘクトール』なり、『ランサー』なりで言つて欲しかつたなあ……」

右手どうしの握手が、彼らふたりの契約の証。

ここに、即席のサー・ヴァントとマスターの主従契約が成立したのだつた。

「ところでオジサン、ちょっと聞きたいんだけどさ」

「ん~?」

迫り来る骨で形成された魔術人形——竜牙兵を槍のひと突きで吹き飛ばしてから、ヘクトールはマスターの方へと振り返つた。

手元の魔力製の札を操作して指示とブーストをかけながら、『はずつと感じていた疑問を発した。

「んーとさ、このゴミ置き場的ファスト風土、炎上汚染シティ冬木のことなんだけど』
『Quick Quick Arts!』

突きとなぎ払いで竜牙兵三体をまとめて跳ね飛ばしながら、ヘクトールはその質問に答える。

「言いたいことは見当がつくぜ。この世界がどのくらい持つのか、聞きたいのはそういうことだろ？」

「そうそう、それそれ。実のところ、どうなつてるの？ そ、こらへんは」
『Quick Quick Buster!』

「バスターアーツ!!』

「うるさいね…… そんなに叫ばんでもちゃんと分かつてますつて』

短いタメの後、強烈な横薙ぎを繰り出してシャドウサーヴァント・アーチャーを後退させながら、唐突に叫び声を上げたマスターへとヘクトールは切り返す。

「聖杯の力もないこの世界は、どうせ長く持ちやしない。正味、もう次の瞬間には崩壊してもおかしくないくらいだ』

「はつはー！ どうやら事態は思つていたよりはるかに悪いらしいね！ とかドク

ター風に言つてみたり！ ちなみに、この世界が崩れたらオジサンとオジサンのマスターであるところのボクはどうなつちやうのかな？』

『B u s t e r A r t s B u s t e r ! B R A V E C H A I N !』

「バスターーッ！ もいつちよ！ バスターーッ!!」

「うるせえ！ 聞こえてるつつってんだろ!!」

槍を大上段に掲げ、高く跳び上がつてシャドウサーヴァント・アーチャーへと急転直下、そのままコンビネーションへと持ち込みながらヘクトールは反駁する。

「当然、世界の崩壊に巻き込まれて、誰からも観測できない時空の狭間のノイズに均されちまうつて寸法だ。もつとも、オジサンは英靈の座に帰るわけだから、消えちやうのはマスターだけつてことになるかなあ！」

「はつはつは！」

「笑いごつちやねえよクサレオヤジ！ こちとらこんなどこかも分からぬような場所で消えるのなんて、まつびらごめんだ！ ちゃんと帰るための算段とかあるんだろうね！」

「いちおう、それっぽい目星はあるぜえ！ そうら、おかわり要るかい……つと!!」
いい加減でありながら狙いは堅実そのものな槍さばきの連撃でシャドウサーヴァントを影の塵へと還したヘクトールは、大儀そうに伸びをして首をコキコキと鳴らした。

「つたく、人使いの荒いマスターだねえ…… こちとら得意は防衛戦だぜ？ 攻めは

苦手なんだよつてに』

「そのわりには、けつこう生き生きと動いてたように見えたけど？　たまには身体を動かすのも悪くないんじやない、オジサン？」

「へつ、言いやがる」

くつくつとニヒルに笑いながら、ヘクトールは槍を小脇に抱え直し、再び歩みを進め始める。

そのまましばらく、互いに言葉を交わすことなく冬木の町並みを歩き続けるふたり。迷いなく歩を進めるヘクトールに追従する『』は、しばし無言で己の臨時サーヴァントを見上げていたが、やがて、

「ずっと聞きたかったんだけどさ」

と、唐突にそう切り出した。

足の動きは止めずに、なんだあと首だけ巡らせてヘクトールはマスターである若者の方を見遣った。

「オジサンはさ、こんなゴミ置き場でいつたいなにしてたの？」

「ふむ、もつともな疑問だが……さてねえ」

槍を抱えていない方の手でボリボリと頭を搔きながら、ヘクトールは少しの間、躊躇うように間を持たせた。

「ところでマスター、話は変わるけどよ」

「いや変えんなよ。質問に答えろよ」

「ごめんごめん、言葉の綾つてやつだよお。そんなに怒んなつて」
そうさな、とヘクトールは悪戯っぽく笑つて、質問に質問で返した。

「マスターは、『守る人間』と『攻める人間』、自分がどつちのタイプの人間かについて、
考えたこととかあるかい?」

「ん? タイプ……? それって、SとかMで答えればいいの?」

「いや、そーいうんじやなくて…… あー、まあ、極端な話、つまるところはそういう
ことなのかもしんないね。うん」

自己完結すんなよとぼそりと洩らしながらも、いちおうは考える素振りを見せた若者は、それほど間を置かずにヘクトールに向かつて答えた。

「激Sだね。バーサーカーでバスターバスターするのが一番ラクだし、なにより樂しいし。てか、オジサンの攻撃力しょっぱすぎ。もうちょっと火力出せないの?」

「はつは、こりや手厳しい。せいぜい善処するよ。でな、そういうオジサンはと言えば
……ま、言うまでもないだろ?」

「うん、ガツチガチの守備タイプ。ボクとはまったく合わないタイプつてわけだ」
「ぐくつ、そういうこつたな」

それが答えのさ、そう韜晦するように締めくくつたヘクトール。

それが答え、と若者はヘクトールの言葉を反芻して、首をひねりつつ思索にふけり始めた。

「——おつと、考えことはそろそろ終いにしといたほうがいいと思うぜマスター。そら、見てみな」

「んーん？ ……おおつ！」

見れば、いつの間にここまで歩いたのやら、そこはかつて冬木で戦った折の最後の戦場。

黒き卑王が聖杯を守護していた場所、大空洞であつた。

そして、ヘクトールが指差す先を目で追つた『』は、すぐにそれに気づくことが出来た。

「おお、あの露骨に時空の裂け目っぽい亀裂は、まさか……！」

「そ。十中八九、帰り道だろうさ。いやあ、良かつた良かつた。オジサン、無事にミツシヨンコンプリート出来そうだねえ」

「ヒューッ！ なんだかんだやることやつちやつて！ このこのお！」

その場でぴょんぴょんと大袈裟に跳ね回つて喜びを全身で表現する『』の姿に、目尻を下げる相好を崩すヘクトール。

どちらからともとなく両手を掲げ、ハイタツチの構えに入つたふたり。

しかし、その喜びのムードは残念ながら、一瞬にして霧散することになつてしまつた。
「……あーらら。こいつは、ちつとばかし……」

「わあ、実に分かりやすい絶体絶命……」

大空洞の入口から、雲霞のごとく押し寄せる骨の波——無尽蔵の竜牙兵の大群が、雪崩込んでくる。

さらに、その大軍団の最前列。

竜牙兵の一団を従え、さながら将軍のごとき威容を放つ黒甲冑。
見間違えようもないその姿は、黒き魔王。

「セイバー・オルタ……！」

熾烈を極めた過去の戦いの記憶が、覚えず『』の身体に戦慄を走らせる。

気圧されるように後じさりした若者に対し、ヘクトールは落ち着き払つた佇まいに静かにマスターの前に進み出た。

「なに、ビビるこたあないさ。もうここまで来りやあ、あとはその帰り道にダッシユするだけでオツケーだ。オジサンのことはいいから、早く行きな、マスター」

「なつ……！　おいおい、そりやないでしょオジサン！」

思わず後じさつた距離をそのまま引き返し、『』はヘクトールのマントを引つつかん

だ。

「てめつ、この……！　……はあ、いいかマスター」

一瞬だけ気だるげな仮面を被り忘れて険しい眼差しを投げかけてしまってから、ヘクトールは思い直して緩くへらりと微笑み直した。

「言つたよな。オジサンは、守るタイプの人間だつて」

「だからなんだよ！　早く行くぞ！　今ならまだ間に合うかも……！」

「そいつは確実じやない。ああ、まったく確実じやない。あの黒甲冑が宝具なんてぶつ放そうもんなら、裂け目ごとマスターが吹つ飛びかねん。オジサンは、奴を止めにやあならねえのさ」

「うるさい！　命令だ！　ボクといつしょに、カルデアに帰還……！」

「――マスター」

若者の言葉を遮つて、ヘクトールは背を向けた。

猫背氣味な背を伸ばし、槍を身体の真ん前に垂直に突き立てた。
大きな背中だと、『』は場違いな感想を抱いた。

「――指示をくれ」

たつた一言、静かにキッパリと。

ヘクトールは、それだけ言つた。

「…………っつ!!」

ギリギリとこれ以上ないほどに歯噛みして、『』は地団駄を踏んだ。踏んで踏んで、そして。

帰り道の裂け目へと、踵を返した。

返しながら、声の限りに叫び散らした。

「——スキル発動！『軍略』!!」

「了解！そら、よつと……!!」

『』は、振り返らなかつた。

足を止めれば、彼の思いを無為にしてしまう。だから、振り返らずに、裂け目へとひた走つた。

「標的確認、方位角固定——！」

彼は言つた。自分は守るサーヴァントだと。

彼はいま、全力で己の使命を全うしようとしている。

なれば、ボクはボクのサーヴァントに報いるために、全力で己の身を守らなければならぬ。

それが、彼が望んだことならば。

彼が全力で守ろうとしているボクを、ボクは全力で守るだけだ。

走る背に、宝具解放の文言を謳うヘクトールの声を受け。
ただただ、『』はひた走った。

「――『無毀の極槍』――!! 吹き飛びなあ!!」

「…………ああああああっ!!」

凄まじい熱量と爆風に後押しされるように、『』は最後の一歩を踏み出して、裂け目の
中へ飛び込んだ。

それを合図にするように、裂け目はみるみる内にその隙間を閉ざしていく。
荒く息を吐きながら、『』はようやくそこで後ろを振り返った。
振り返つて、後悔した。

「――ヘクトール!!」

その叫びが届いたのか、ヘクトールは緩慢な動作で、だるそうに『』の方へと顔を向
けた。

——笑っていた。

出会った時と同じく、どこかくたびれた空気を纏いながら。とても満ち足りた顔で、彼は穏やかに笑っていた。

その身体を盾として、卑王の刃を受け止めながら。

ヘクトールは、静かに笑っていた。

「約束だ！ ヘクトール！ ボクは必ず、もう一度お前を召喚する！」

「…………」

「だから、これはお別れなんかじゃない！ さよならなんて、言わないし言わせない

！」

「…………」

「命令も聞かないダメなサーヴァントを、わざわざ召喚してやるって言つてるんだ！
ありがたく思えよ！ 絶対に忘れるなよ！」

「…………」

「ありがとう！ ボクのことを守ってくれて！ 本当にありがとう！ トロイアの英

雄！！」

「…………」

ちゃんと言葉が届いたかどうかは分からない。

ヘクトールが命を懸けて稼いでくれたその距離は、あまりにも遠かつた。

あるいはそれは、単なる錯覚に過ぎなかつたのかもしれない。

しかし、『』の目には、最後の瞬間のヘクトールの唇が、こんな風に動いたように思えた。

そう、思いたかつた。

「——へいへい」

「お前は……」

ヘクトールは、目を見開いて固まる『』の言葉を、黙して待つた。

なんと言つてくれるのかと、期待しながら待つていた。

やがて、見開いた目を今度は細めて、『』はぼそりと呟いた。

「…………誰だ？」

「……へつ？」

あまりに予想の斜め上を行くその返事に、ヘクトールは素で間抜けな返事を返してしまつた。

慌てた様子で、マシユと呼ばれた少女が割り込んでフォローを入れてくる。

「せ、先輩！ いくらなんでもそれはないでしょう！ ほら、ヘクトールですよ！ ヘクトール！ オケアノスで我々と戦つた、トロイア戦争の英雄ですよ！」

「んー？ んー…… ああ、あの胡散臭いオツサンか」

「えつ、ああ、いや、それはたしかにそうだけどもさ…… ほら、他にもつとあるだろ？」

遠い日の約束みたいな感じのアレとかさ！」

「なにぶつこいてるんすかオツサン、もしかしてナンパのつもり？ お呼びじやないんで、星5のサーヴァントとチエンジでプリーズ」

「いい加減にしないと殴りますよ先輩！ 盾でガツンと!!」

「なんだ、とすっかり拍子抜けしたヘクトールは、今度は呆れたように乾いた笑いを零した。

(そりやそうか。言つてみりや、あの出会いも異常な空間のバグみたいなもんだつたの

かもな)

バグが世界の強制力で修正——均されたのなら、あの世界の記憶が残つていないのである意味当然の帰結というわけらしい。

異様な疲れとやるせなさ、それにかなりの気恥ずかしさがこみあげてきて、なんだかヘクトールは無性に帰りたくなつていた。

英霊の座でもトロイアでも、もうここ以外ならどこだつていいや。

せつかく浮き足立つて駆け付けたのに、馬鹿みたいじやないか。

自分ひとりだけ覚えてて、当の本人の言いだしつペが忘れちまつたなんて、そんな不条理な話があつてたまるもんかと。

「…………ん？」

「ん？　じやないよ。つたく」

ふと顔を上げると、目の前には差し出された右手。

召喚主である若者の、差し出された右手があつた。

「呼んじやつた以上は、オツサンもボクのサーヴァントだ。よろしくしてくれつて、そう言つてんの」

「……つは。ははは」

「なに笑つてんのさ、氣色悪い」

「いやなに、つくづく面白いガキだと思つてさ」

「わけが分からぬオツサンだね。呼符に還すぞコノヤロウ」

「おーおー、やれるもんならやつてみやがれ」

どうでもいいか、とヘクトールは最終的に自分の中でオチをつけた。
覚えてようが忘れてようが、どうだつていいじゃないかと。

これからは、この若者が己にとつてのトロイアだ。

全力で愛し、守つていけばいいだけだと。

右手どうしの握手が、彼らふたりの契約の証。
ここに再び、契約は成立した。

星の声 ↗ 悪漢王は嗤わない ↘

声が、聞こえる。

囁くでもなく、がなるでもなく。流れるままに流れる声が、私という器を満たす。
——均せ、均せ、均せ。

声はいつも、紅い空から降つてきた。

紅い空から降り注ぐ指令こえいが、私という器を操作うごかした。

平らかなるべし、根絶やすべし、駆除すべし、踏み均すべし。

そうやつて、私はずつと動作してきた。

受信して、実行する。

そうすることしか知らなかつた。

そうすることでしか、私は、私を続けられなかつた。

蹴散らして、絶滅させて、一掃して、灰燼と帰して。

森を焼き、地を踏みにじり、川を干上がらせ。

家を焼き、街を踏みにじり、国を干上がらせ。

ただひたすらに、壊して壊して壊して壊した。

馬も羊も狼も牛も、男も女も青年も老人も赤子も。

私が壊した文明と共に、あまねくすべて死に絶えていった。

破壊せよ、破壊せよ、破壊せよ。

装置のように、機構のように、理屈のように、理論のように。
紅い空から降り注ぐ声に従つて、私は眼前の大地を紅く染めた。
緑の草を濡らして、青い川を汚して、白い骨を踏み潰して。
私はこの星を、紅く染め上げた。

目標

願わくばと、今の私はそんな風に思考してしまった。

英雄としての私ならば、抱こうはずもなかつた感情。
英靈となつた私が覚えてしまつた、致命的なエラー。

冷たい装置であるはずの私が、灯してしまつた小さなゆらめき。

願わくば、ああ、願わくば。
誰か、私を。

「……破壊、する」

下腹に響く衝撃が遙か遠雷のように低く轟き、断続的な余震に似た振動によつて、白亜の壁と天井が休むことなく揺さぶられ続ける。

揺れで天上から落ちてきた埃を手で払いのけながら、リボルバーの銃身でくせつ毛気味の髪の毛を弄る少年は、人懐っこい笑顔を隣で控える少女へと向けた。

「……えー、それで？ 状況はどうなつてるわけ？」

「はい、ビリーさん。現在、目標は第7セクターを突破。第1から第6までの防衛ラインは総崩れで、非戦闘要員が負傷者の救護に当たつている最中です」

大柄を携えたデミ・サーヴァントの少女、マシユ・キリエライトは投影された戦況図を繰りながら少年の質問に答える。それを聞いた少年——悪漢王ビリー・ザ・キッドは、あららと氣の毒そうに呟く。

「そりや大変だ。まあ、簡単に足止め出来るわけはないだろうつて踏んでたけど、よりにもよつて全滅かあ。さすが、カルデアが誇る最強戦力はひと味もふた味も違うつてことか」

「今回に限つてはあまり手放しで喜べませんが、ビリーさんの言う通りですね。目標……彼女は、こと戦闘においては他のサーヴァントの追随を許さない強大な戦力。味方

としてはこれ以上ないほどに頼もしい存在です。それと同時に、敵として立ち塞がつた場合の脅威は……」

険しく、そして沈鬱な面持ちのマシューの様子に、ビリーは小さく「ふーん」と同意とも否定とも取れない微妙な声を発して、また髪を弄り始めた。

そうやつて言葉を交わしている間にも、途切れ途切れの地響きは間断なく続き、内壁や天井をぶち抜いているであろう重く低い破碎音はふたりが待機している場所へと明白に近づいて来ている。

目標が、近づいているのだ。

迎撃に当たるため、急拵えで築かれたバリケードの陰に背を預けているふたりの様子は、いかにも対照的だった。

「～♪ ～、～～～♪」

髪を弄る動作に合わせてハミングを取っているビリーの方は、表面上さして気負つたところのない自然体であるが、

「……つ」

擊碎の音がひと際大きく響く度に、時折反射的にぴくりと身じろぎを繰り返すマシュー。

不安そうに唇を噛んでいる彼女の方はと言えば、お世辞にもリラックス出来ていると

は言い難い有様だ。

ちらと横目でそれを窺つたビリーは、生真面目だなあと心中で小さく感嘆して見せた。

別に彼女を馬鹿にするような意味などない。彼は素直に感心していたのだ。

既に少くない場数を潜り抜けているはずの彼女は、しかし一向に「慣れ」を見せようとはしない。

が、彼女のそれは、臆病風に吹かれたとか及び腰だとか、そんな悪いニュアンスを含んだスタンスとは違っている。

良い意味で、初心を忘れない。ベテランでさえ時たま見失うその才覚を、彼女はしつかり身をもつて実践しているのだつた。

(とは言え、ちよつとは力抜かないとねー。せつかくの可愛い顔が台無しじゃないか)

マシユから視線を外すと、ビリーはなんとはなしに天井を見上げた。

「彼女つてさ、あんまり笑わないじゃない？」

「えつ？　あ、はい。彼女、ですか？」

出し抜けに始まつた会話に、豆鉄砲を食らつたような顔をしたマシユは微妙に付いていけずに微妙な相づちを打つた。そんな彼女を見て、緩く笑いながらビリーは続ける。「いやさ、たとえば僕つていつもニコニコ笑顔だろ？　この顔がデフォつていうかさ」

「はあ、まあたしかに。ビリーさんが笑顔を絶やすことは、あまりないことだと思われます」

ややアイロニカルに笑うビリーに、マシユは嫌味の無い調子で返した。その反応に、ますます自嘲的な表情を深めた彼は、眉を八の字氣味に歪める。

少しだけ困ったように、腕を束ねて彼は言う。

「ぶつちやけ言うと、僕って特に面白くなくても笑ってるんだよ。これが」

口調はあくまでも軽く、天気を話すようになんでもない調子でビリーは言う。

(ビリーさん……)

マシユは、ビリーのさらつと流すような言葉から、たしかな重さをしつかりと感じ取っていた。

感じ取つたからこそ、その告白に驚きながらも、マシユはしつかりと言葉を返した。
真摯に、虚飾なく、心の底から返した。

「……そうだつたんですか？ ビリーさんは、カルデアでも随一のムードメーカー。その笑顔と軽妙なトークでみんなを和ませる清涼剤のような方だというのに、私の認識だつたのですが」

「あはは、嬉しいこと言つてくれるねマシユちゃんは。そつかそつか、そう思われてたのか」

マシユの言外の意を汲み取ったのだろう。ならいいんだよ、と今度こそ嫌味なくビリーは言った。

不思議ちやんで生真面目な、彼女の真意を彼もまた汲み取ったのだつた。
「付け加えると、『カルデア女性サーヴアントが選ぶ女装が似合いそうなサーヴアント』ランキングでは、ラーマさんと常に熾烈なトップ争いを繰り広げている期待の新星です」

「あはは、そつかそつか照れるなあ……って、ちよつと待つて今なんて?」

「さらに付け加えると、『ケルトの元気男フェルグス叔父貴が選ぶプロレス（夜）対戦相手希望』ランキングでも、最近メキメキと頭角を現し始めている麒麟児……」

「マシユちやん頼むからちよつとそこらへんで勘弁してくんないかな」

露骨にげんなりした顔色へと変わったビリーは、ノーセンキュードと疲れた様子で手を振つた。

そうですか、とマシユの方もそれ以上はカルデアの闇を徒に語ることなく、口を閉ざした。

「……でもね、マシユちやん。今の僕は、案外そうでもなかつたりするのさ」

陽気なアウトロー、悪戯好きな少年悪漢。

生前の彼は言わずもがな、召喚されたサーヴアントとしても。ビリーはそんな己のス

タンスを、処世術を、ずっと曲げられないでいた。

日陰者だつた彼が、無法者の彼が、自らに課した金科玉条。

それが、陽気な少年悪漢王としてのビリー・ザ・キッドだつたのだから。

薄暗い夜の闇の方が、自分の性には合っている。それは今でも変わらない。

だけれども、少しだけ。ほんの、少しだけ。

日の当たる場所も悪くないと、そう思える自分が居る。

そう思えるようになりつつある、中途半端なアウトローがここに居る。

「嬉しくなくとも、楽しくなくとも。殺す時も、殺される時も。いつもいつでも笑つてた僕だけど、今はちよつとだけ……ううん。かなり、かな？　とにかく、わりと素直に心の底から笑えるようになつてるんだ」

だからこそ、と彼は腰を上げ、音を立ててパンツの尻部分を叩きほろつた。

ビリーの様子から何かを察したのだろう、同じく座り込んでいたマシューも大柄を拾い上げながら立ち上がった。

「だからこそ、ちゃんと笑えるようになつた僕だからこそ、分かるようになつたんだけどさ」

「……そんな、まさか」

気づけば、いつの間にか轟音は直接肌を震わすほどの距離にまで接近してきていた。

音が、壁を揺らす。衝撃が、身を揺るがす。

破壊が、足音も高く迫り来る。

「あんまり笑わない彼女が笑う時つて、本当に嬉しい時だけなんだよね」

嬉しいから、笑う。

人間なら当たり前のシステムが狂っていた彼が、生前は忘れてしまっていた至極簡単なロジック。

笑顔の安売りばかりしていた彼だからこそ身に染みて実感する、その笑顔に懸けられた重み。

「君の笑顔に乾杯、掛け値なしに僕は君の笑顔が大好きなんだよ、ベイビー」

——僕だけじゃない、マシユも、ドクターも、ダ・ヴィンチちゃんも、他のサーヴァントたちも。

——そしてなにより、僕らのマスターである『』も。

——みんなみんな、君のことが大好きなんだ。

「それがさあ、なんてツラしてるのさ。いつペん鏡、見てみなよ？」

——ああ、今の君は、とても見るに堪えないや。

「――目標……破壊、する」

——なんて痛ましい、物騒な顔をしてるんだい？

「そ、そんな！ 第7防衛ラインまで突破されたなんて……！」

大いに焦り、もつれ気味になる指を繰って、マシユは眼前の目標からは目を離さぬままに戦況図を横目だけで確認した。

彼らが控えていた第8防衛ラインは、言わば申し訳程度の予防線のような代物であり、本命だつた主戦力はすべて第1から第6までの防衛線に投入されていたのである。特に、第7ラインには目標を制圧するのに最適解だと判断された『弓兵』のクラスのサーヴァントたちが多く投入されており、実質的な阻止限界点は第7であるというのが作戦本部の見立てであつたのだ。

それが、失敗した。突破されてしまった。

絶望感が、膝からガクガクとこみ上げてくる。腹にずしりと压し掛かるプレッシャーに、マシユはぐくりと喉を鳴らした。

「なんて、強さ……」

はじまりは突如、カルデアセクター第2層で発令された物々しいアラーム。すべては

そこから始まつた。

カルデアに召喚されていたサーヴァントのうちの一騎が、突然マスターの制御を離れて暴走。

事態を察知したドクター・ロマンが対象への魔力供給を8割までカットしたもののは、目標の暴走は一向に終息を見せないまま継続。目標の進路はカルデア最奥の最重要機構、レイシフトを管制するラプラスとトリスメギトス。マスター候補たちを冷凍保存しておくための靈子筐体。そして、人類史を映した巨大地球儀・カルデアス。

それらすべての破壊。目標の破壊活動の対象は以上のように断定された。

暴走する目標を鎮圧するために、カルデアは保有するほぼすべてのサーヴァントを投入して防衛線を構築。これの制圧にあたるも、甲斐なく防衛線は瓦解の一途を辿つた。

(……これが、戦闘王の力。軍神の力……！)

—— フンヌの大王、アルテラの圧倒的な力。

「やれやれ、まったく恐れ入るね。殺氣だけでちびりそうだよ、僕」

言葉とは裏腹に臆した雰囲気などまるで皆無なビリーは、呑気そうに愛用のリボルバーでガンスピンをキメている。堂に入ったその態度に、少しだけ緊張を忘れて脱力したマシユだったが、すぐに気を引き締めなおしてアルテラの姿をじっと観察した。

(無傷……ではありますね、さすがに。ここまで防衛線に阻まれて、かなりのダメー

ジを負つて いる ようです)

実際、彼女の身体はあちこちが傷だらけの酷い有様だった。切り裂かれ、穿たれ、焼け焦げて、無事な部位など何処にもない。それでもなお、彼女は進軍を止めようとした。歩むことを、決して止めようとはしていなかつた。

己の損傷を顧みず、ただオーダーを実行するのみの戦闘機械。

そんな在り方を容認してしまつて いる 今 の 彼 女 こ そ が、何よりも一番むごたらしい。マシユは、そう思わずにはいられなかつた。

「アルテラさん！ 目を覚ましてください！ 正気に 戻つてください！」

彼女の必死の叫びに、軍神は答えない。

「目標、破壊する……」

どこか遠くを見るような眼で。

紅く輝く瞳で、操られるように指令を繰り返すのみ。

「うーん、こりやどう見ても普通じやないね。いや、分かつてたけど普通じやない。あからさまに、どこかの誰かに操られてるっぽいじやあないか」

面白くない、と鼻から短く息を吐いたビリーは、ガンスピンをキメたまま、アルテラとマシユ、両者の間へと割つて入る位置に歩を進めた。

それ違いざま、ポンと軽くマシユの肩に手を置いたビリーは小さな声で一言、

「急いで、マスターのところまで走るんだ」

それだけ言つて、アルテラと向かい合つたまま動かなくなつてしまつた。

彼の意図を図りかね、無茶だと反駁しようとしたマシユを遮るようにビリーは高らかに言い放つ。

「さあさあ、天下の軍神様。カルデアスここは素晴らしい最後の砦。ラストスタンドこの先には冷たい棺桶と大きな地球儀！　背負つて立つは、男一匹孤独なガンマン！　相手に取つて不足と思うかい？」

いや、違う。マシユは即座に、理解の修正を迫られた。

戦力の優劣、勝敗の如何。どこをどうひっくり返しても、手負いの軍神を相手にしてこちらが勝てる見込みは一切存在しない。

ただ、彼女が理解したのは、たつたひとつ明確な危険。

『食い殺されたくないなら、邪魔立てするな』

飢えた狼のようにギラギラと輝く眼。背中越しでもはつきりと感じる、獰猛な獣の息遣い。

沸き立つ血を抑えきれない、死地への渴きを望んでやまない、アウトローの野蛮な情熱。

この場から離れなければ、眉間に風穴を開けられるのは自分の方だ。

マシューは、一目散に踵を返して戦線を離脱した。振り返りざま、叫びながら付け加えるのも忘れなかつた。

「待つていてくださいビリーさん！ 少しだけ、どうかあと少しだけ踏ん張つていいください！」

「うーん、出来るだけ急いでねー」

後ろは見ずに、手だけひらひらと振り返してビリーはほうつと溜息をひとつ吐いた。その間ずっと、眼前のアルテラからは視線を一瞬たりとも外していなかつたビリーは、ここに来てようやくと言うべきか、牽制するように翳していたリボルバーを腰のホルスターへと戻してしまつた。

一見して隙だらけの態勢へと変じたビリーに対し、アルテラの方はこれを好機とは判断せずに、彼と同じく不動の姿勢を崩さない。

無理からぬことだ。一流の英靈ともなれば、彼の今の立ち姿に対して、隙だらけなどと間違つても判断すまい。

わずかにでも判断を誤れば、小指の一本でも動かせば、即座に頭蓋を持つていかれる。

音よりも速く、雷よりもさらに刹那的に。

『壊音の霹靂』^{サノダラ}が、寸分の狂いもなく無数の風穴を穿つだろう。

「どうも、いろいろ鈍つちやつたかなあ？ やんなるよね、ホント」

困ったなあ。

へらへらと笑んだビリーは、左腰のすぐ近く、銃把のすれすれ直上でぶらぶらと左手を遊ばせた。

(何かを守るアウトローだつて？ 笑い話にもなりやしないじゃないか)
守るものなど何もない。身一つで荒野を彷徨い歩き、腰の銃だけを頼りに生きていく。

首に懸かつた懸賞金が命の価値。くたばつたら何一つ残らない。

闇に生きて闇に死ぬ、それこそがアウトローの不文律だつたはずなのに。

笑つちまうような半端者、甘つちよろい糞ガキ^{キツド}。

でも、なぜだろう？

「なんだかいつもよりずっと、負けられないテンションになつちゃつたな……！」

「…………！」

耳まで裂けよど笑つた獣が、飛び掛かる力を溜めるように足を引いて腰を低く落とした。

相対した軍神も、眼前の獣を誅戮するために、携えた剣を眼前に構えた。

(ま、思い返せば今さらか。以前の僕は、アメリカを守るために呼ばれたんだつけ)
少年悪漢王、世界を救う。

そんなフレーズを思い浮かべ、ビリー・ザ・キッドは今度こそ、腹の底からこみ上げてくる得体の知れない「なにか」を感じた。

「安心しなよアルテラちゃん。スマートに終わらせられるなんて、これっぽっちも思つちやいないからさ」

なんて、笑える。なんて、可笑しい。なんて、愉快な。

至上の快楽が、ここにはある。究極の悦楽が、ここにはある。
最高にして絶好の、これ以上は望めないほどの晴れ舞台。
魂を震わす、壮絶な果し合いが始まろうとしているのだ。

「撃つて撃つて撃ちまくる、OK牧場の決斗と行こうじゃないか」